

トレセン学園生徒会室。午後のトレーニングも始まり窓の外から練習に励むウマ娘やトレーナーの声が聞こえてくるそこで、ナリタブライアンはエアグルーヴと並んで生徒会長の椅子に座るシンボリルドルフと対峙していた。

他の役員はそれぞれトレーニングに出ているか、サポート科の生徒であれば午後の授業に出ているので、今は室内に三人だけ。ナリタブライアンは走る時間を削られているからか、シンボリルドルフを見る目に少し陰しさが滲んでいる。

「で、わざわざこの三人だけで何の話があるんだ」

苛立ちを隠そうとしないナリタブライアン。普段であればエアグルーヴが窘める場面であるものの、彼女も同じような疑問を抱いているのか、特に何を言うでもなくシンボリルドルフを見ている。

そんな二人に対して、シンボリルドルフは「ふむ」と涼しい顔で一つ頷いた。

「時間を取らせてしまつてすまない。元より長話をするつもりはない——が、一つだけ言わせてほしい。二人とも、此度のURAFアイナルズ中距離部門、決勝進出おめでとう」

「それを言うならば会長の方こそ、決勝進出おめでとうございます。しかし決勝のレースではお手柔らかに、などと言うつもりはありません。私は全力で勝ちにいきます」

エアグルーヴの宣戦布告にシンボリルドルフは楽しそうに、あるいは嬉しそうに口角上げる。「これは明日秋川理事長から発表があるだろうが、中距離部門の決勝レースは東京レース場の

2400メートルとなったそうだ。クラシックダンス——その上我々には何かと縁のあるコース。雌雄を決するに相応しい舞台だと私は思う」

その言葉を聞いて、今度はエアグルーヴが微笑み、頷いた。

ダービー、オークス、ジャパンカップ。幾多の夢がそこに挑み、数多のドラマが生み出された舞台。世界を変えるのに三分も足りない——と言ったのは、果たして誰だったのだろうか。

「本気というならアンタの方だ。会長……いやシンボリルドルフ、私はそこでアンタと戦えるのか？」

それまで二人の話を聞くだけだったナリタブライアンに、シンボリルドルフは少し意外そうに目を開き、しかしすぐに表情を和らげてずっと椅子から立ち上がった。

「今回のURAファイナルズは理事長の発案で、運営も理事長とURAが主体となって進められている。こちらの仕事は全く無い訳ではないが、ありがたい事に理事長からは決勝レースに集中してほしいと言われてね」

「……つまり？」

「先ほどエアグルーヴは本気で勝ちにいくと言ってくれた。それはブライアン、君も同じだと思う」

窓辺に寄って外を見ていたシンボリルドルフが「だが」と一つ置いて二人に向き直った。

「勝利への執念や渴望、燃える宝石のような煌めきをもし形に出来たのであれば、私こそが最

も大きなそれをこの胸の内に秘めていると断言出来る。約束しよう。決勝レースは皇帝としてではなく、生徒会長でもなければシンボリルドルフですらない。ただ一人の最強の座を欲するウマ娘として私は走り、そして勝つ」

その言葉に嘘やお世辞が欠片も含まれていない事を、二人は瞬時に悟った。隠そうともしない気迫、ウマ娘としての闘争本能。目には見えなくても、シンボリルドルフのそれが痛いほどに肌で感じられるのだ。

ともすれば気圧されそうなほどのプレッシャーを受けて、釣られたようにナリタブライアンもその目にギンと揺らめく炎を宿す。最早最初に感じていた苛立ちなどはとうに消え去り、それとは全く別の感情が自分の中でぐつぐつと沸き立ってくるのを感じていた。

「——と、言ったばかりだというのにまた話が長くなってしまふな。いやすまない、私とした事がどうにも気が逸っているらしい。一日千秋の念を抱くなど遠足の日待つ子供のようで気恥ずかしい限りだが、やはりこればかりはどうしようもないな」

一転、張り詰めた空気を和らげるように眉尻を下げて笑うシンボリルドルフに、エアグルーヴが「いえ」と首を振った。

「それは私も、いや私たちも同じ想いです。模擬レースや学園内のイベントでは共に競った事もありましたが、公式のレースでこの三人が同じターフを走るのは初めてですから」

エアグルーヴの言葉に隣のナリタブライアンも黙って一つ頷く。それはきつと、それぞれの

部門で決勝レースに進出した出走メンバー全員にも言える事なのだろう。誰もがいつそ明日が本番であればと思い、逸る気持ちを、疼く脚をどうにか抑えているのだ。

そんな様子にシンボリドルフはやはり嬉しそうに「ああ」と答えて机の方へ戻ると、そこに置かれていたタブレット端末を手に取り、ついと指を滑らせる。

「だがレースはもちろんそうだが、私が楽しみにしているのはそれだけではない。今日こうして二人に来てもらったのはこれを見せたかったからであって、これこそが私の気を逸らせる要因だと言っても過言ではないだろう」

「レース以上の……？ そんなものがあるのか？」

「ブライアン、君にとってはレースこそが目指す場所であるというのは理解している。しかしトウインクルシリーズにしてもドリームトロフィーにしても、それらを構成し、また私たちを応援し、見てくれるファンの方々が望むのはレースばかりではないという事を忘れてはいけない」

「決まったのですか？ URAファイナルズのウイニングライブが」

ウイニングライブ——レースの後に行われる、ウマ娘がファンと喜びを分かち合うためのステージ。そのセンターに立てるのはレースの勝者だけであり、レースの名誉と共にそこを目指すウマ娘も少なくない。もちろんそれは今回新設されたURAファイナルズも例外ではなく、先だって行われたイベント等で候補に挙げられた曲もいくつか既に披露されている。



暮れなずむ夏空に、夢見心地のような遠さの祭囃子を聞くことができる。今夜は地域の夏祭りが行われる予定で、なので私は午後からの半日をオフと決めていた。担当ウマ娘が仲間たちと海へ行くのに任せ、ひとり祭囃子に誘われるように合宿所の周りをあてどなく散策などして時間を潰していたが、やがて小腹が空き、目についた小さな蕎麦屋の暖簾をくぐることにした。二度目の夏合宿も、気が付けば早くもひと月半が過ぎようとしている。ここまでがむしろに走ってきたけれど、そろそろ秋戦線を見据えた調整に時間を割いていく頃合いか。

けれど私はあまり不安を覚えていない。私の担当するウマ娘は順調に力を蓄えている。武器とする瞬発力にもさらなる磨きをかけ続けていた。この調子であれば、当面の最大の目標たる天皇賞で危うい走りをするにはあるまい。何も憂うことなどない、心置きなくざるそばを手繰れるというものだ。

「すいやせん、お客さん。今日は早めに仕舞いにしたいんですが、いいですかね？」

二枚平らげて熱いお茶をちびちびなめていると、店の奥からそう声をかけられた。板前にして店主であり、唯一の店員である老人だ。やたらと大きな声が、私のほかに客のいない店内によく響いた。

窓を見れば、ようやく太陽が山際に姿を隠そうとしている頃だった。確かに閉店にはまだ早いが、祭りに関係してのことだろうか。私は勘定に立ちながら尋ねてみた。

「まあ、そんなところであ。あたしや余興の方に顔を出すんですがね」

彼が言うところの夏祭りの「余興」に、私は心当たりがあった。バイク好きが集まり、公道の一部を鎖して臨時のサーキットに仕立て上げ、そこでドラッグレースを行うのだ。私は去年、ウマ娘たちと共にそれを見物し、相当な刺激を受けた。思い出すと、あのとき感じた熱が胸によみがえってくるようだった。

「もしかして、ゼロヨンですか？」

「おや、ご存じで。地元の連中以外にはあまり知られてないと思ってただけどね」

老人は目を丸くしつつも、嬉しげに肩をすくめた。

「お客さんも見に行くのなら、せっかくだ、一緒に行くとしやしようか」

この後の予定といえば、祭りの縁日を冷やかそうかとぼんやり考えていた程度だったので、私はこの誘いに乗ることにした。きつと担当のウマ娘もそこに顔を見せるだろうから、また一緒に観戦するのも良いだろう。

共に玄関から外へ出て、老人が戸締りするのを待つ。周囲に広がる田園風景は夕闇にうつすら飲み込まれつつあり、あちこちに街灯がぼつぼつと光をこぼしていた。

店先には出前用と思しき、ごく小排気量の原付が一台置かれている。ヘルメットとキーを手になんてかかろうとする老人を見て、私はもしやと考えた。

「ひょっとして、あなたもそれで参加されるんですか」

「まさか、バカおっしやいよ」

老人はからからと大声で笑った。それから逆に訊ね返してきた。

「あんたこそ、このレースに興味あるってことは、バイク乗りなんだろう？　どうだい、飛び入りで参加しちゃ。新規大歓迎ってえ話だぜ」

商売の時間が終わったからか、急に彼の言葉遣いがラフになったことに面食らいながらも、私はかぶりを振った。

「バイクは乗ったことないです」

「普通免許は？」

「持ってますが……」

「ならこいつには乗れるな」ポンと原付のシートを叩いて見せ「楽しいぜ、二輪」

さらに、まあちよいと座ってみなよとシートを譲る仕草をしてくる。私は原付に近寄ったけれど座りはせず、なんとなくハンドル周りを見た。スピードメーターに目が留まる。そこに刻まれた最高の数字は六〇だった。

「回し切りやあ、その二割増しくらいは出せるぜ」

私の視線の先を辿ったのか、老人が補足してきた。つまり、時速七十キロメートル超。ウマ娘のトップスピード帯に並べる数字だ。そう思うと奇妙な縁が感じられて、私はついうつかりシートに腰を下ろしていた。日陰に置かれていたにも関わらず、シートは夏の大気を吸って熱を帯びていた。



「後から見えてやるから、レース場までちょっと転がしてみるといい。なに、こけたところで、この老いぼれより先に死ぬこたあねえよ」

物騒な物言いをししながら老人がキーとヘルメットを渡してくる。私は免許証の入ったパスケースがポケットにあるはずだということを脳裏で確認しつつ、ごく自然な心持でそれらを受け取った。

アクセルを少し開いただけで体にぶつかってくる風が恐ろしいほど速度を増して、すぐ手首を戻したくなる衝動に駆られる。ウマ娘の速度を体験できるかという軽い期待を持って原付の初運転に挑んだ私だったが、実際は法定速度の時速三十キロを出すのもやっとだった。

それでも走るうちに恐怖は徐々に快感へ取って代わっていった。生身で風を切る、乗用車の運転では味わえない疾走感。自分で速度を制御できる辺り、遊園地の絶叫マシンとも味わいは異なる。昨年の記憶を頼りにレース会場へと辿り着いた頃には、割かし感触を掴めた気になっていた。「彼女たち」の世界を垣間見るには、まだまだだったけれど。

運転に慣れて調子に乗ったせいとか、老人をすっかり置き去りにしてきたことに、やっと気づく。私はレース会場の端っこの方で原付を停めて、彼を待つことにした。

どうやらこちらはスタートライン側らしく、二桁前後のバイクとそのライダーたちが集っている。出走待ちの段階なのか、マシンたちのエンジンは低い唸り声と共に脈打っている。時お



十三名のウマ娘達と一つの塊となつて最終コーナーを駆ける。

テールトゥノーズ、サイドバイサイド、腕や足が接触することなどお構いなし。むしろ多少のラフプレーに怯む者など、この場には不要とばかりに栄光への道筋を奪ひ合う。

無論、こちらから仕掛けはしないが、揉まれる覚悟はとつくにできている。とはいえ、無意味な競り合いは不要。進路を塞がれないよう、けれど外にも振られすぎないよう、バ群の動きを意識しながら流れに合わせてカーブをクリアする。そして視界の開けた左側に、直線の外ラチと巨大なスタンドが映り込む。

瞬間、その背を追い、そしてついに追い越した憧れの先輩からのメッセージが脳裏に浮かぶ。『最終コーナー抜けたら、スタンド最上階、ね』

快速自慢達が覇を競うこの激闘を眼下に見下ろす二棟のスタンドをチラリと見遣る。超満員のファンで埋め尽くされたその建物の最上階、窓際に浮かぶ見慣れた、でも見飽きることのない姿をそこに視た。

モノトーンストライプを基調に、鮮やかな赤が差し込まれた勝負服。米粒よりも小さく映るその姿はゆうに百メートル以上離れている筈なのに、不思議にも目と目が合ったと確信できた。——やっぱり先輩は、運命のウマ娘だ！

七十秒弱の電撃戦の真っ只中、更には曲線と直線の狭間という刹那に、しかし彼女以外の全ては時を止めたように感じられた。

その彼女の手が動く。両手が愛らしい彼女の唇に添えられ、そして真つ直ぐ突き出される。視線の先、こちらに向けて。

それを認めた次の瞬間、心が燃え上がり、身体の細胞全てが持てる力を解き放つ。

意識を前へ戻すと、ゴールラインまでの景色を遮るものは何も無かった。右手側に先行勢と残り四百メートルの目安となっているサインポールを確認して、両の脚に最後の命令を下す。

——行け!!

全身全霊で芝を蹴り、腿を上げ、腕を振る。全身が寸分の狂いもなく運動し、かつて経験したことのない力でこの身体を押し上げる。

女神に捧げる、勝利へ向けて。

北回歸線直下の香港といえど、十二月ともなると夜は少々肌寒く感じる。とはいえ、薄手の上着の一枚でも羽織ればことは足りる程度であり、乾期の安定した気候と相まって、秋から冬のこの時期は観光のベストシーズンでもある。

事実、ビクトリア・ハーバーの対岸に見えるビル群のライトアップショーに見入る二人のウマ娘は、日中の格好そのままプロムナード全体に流れるバックミュージックに合わせて尻尾

を揺らしている。

ビクトリア・ピークと並んで外せない香港観光の王道であるシンフォニー・オブ・ライトは、香港の商業的中心地である九龍半島南部の尖沙咀地区と、香港島北部の中環、湾仔地区に立ち並ぶ高層ビル群から、音楽に合わせてレーザービームやサーチライトが照射される光のページェントだ。ピークからの『百万ドルの夜景』も良いが、個人的には動的なことにアクセスの良さから、こっちの方が俺は好きだ。特に今回のように複数で動く場合は、行動範囲は狭い方が問題は起きづらくなる。

俺は前のウマ娘達から視線を外し、隣で二人と同じように光彩の演出に見とれている同僚に声をかけた。

「これが一般的な香港観光だが、どうだ、楽しめたか？」

「はい。定番を歩いただけなんでしょうけど、とても面白かったです。今日はありがとうございました」

ビルを見上げていた顔をこちらに向けて、心なしか口調も弾んだ感じで彼女は謝辞を述べる。香港随一のレース場がある沙田のホテルを出て、黄金の仏像がずらりと並ぶ萬佛寺、香港カルチャーの中心地旺角、露店ひしめく女人街と歩き、飲茶で一休み。その後、著名人のプレートや彫像が設置されているアベニュー・オブ・スターズを散策し、スターフェリーでビクトリア・ハーバーを遊覧。日本人の口に合う広東料理の夕食後は夜景と、全くもって否定しよ

うもない鉄板観光コース。とはいえ、初めて香港を歩くのならこれで最適解。王道だ。

「一昨年は移動のトラブルで、去年は二人の帯同でいっぱいだったから、今回改めて香港を楽しめて、ますます好きになったかもしれません」

そう彼女はあどけなく微笑むが、その実かなりの実績を上げている中堅トレーナーで、それ以前にも海外で勝利を取めたこともある名伯楽だ。特に短距離戦を得意とし、彼女のチームを『短距離王国』と呼ぶ者もいるくらいだ。なので、スプリントでは世界最高レベルと言われる香港への遠征は自然な流れ。にもかかわらず観光は初めてだと聞いたときは、自分の耳を疑ったものだ。

「そうだな。一昨年は飛行機にカンヅメ十五時間、去年は念願の香港スプリント制覇でもみくちゃ、それじゃ確かに観光どころじゃないわな」

「カンヅメはアレですけど、去年は本当に嬉しかったんですよ。日本勢に鬼門と呼ばれていたスプリントをようやく勝てたんですから。舞い上がって前後不覚になったことも武勇伝として笑い飛ばせます。ですが……あの娘には良い思い出にはならなかったでしょうから」

だんだん尻すぼみになっていく彼女は、前にいるウマ娘の一人を見て眉をひそめた。

二人はどちらも俺達が担当しているウマ娘だ。ピンクがかった髪の小柄なウマ娘が、俺が担当しているアグネスデジタル。そして隣のプラチナブロンドのウマ娘が、彼女の担当ウマ娘、カレンチャンだ。折り紙付きのスプリンターで、春秋スプリントGI制覇を達成した王国のエ



夜明けまでもう幾許か、黒の中に一滴青を落とし込んだような夜の闇が西の方へと追いやられる空の下。人も街もまだ夢と現の狭間にまどろむ中、そんな静寂を切り裂くように規則正しい足音と息づかいが産声を上げていた。

風の中で生まれたそれを、しかし生みの親ともいうべき主は容赦なく自らの背後へと置き去りにしていく。

腕を振って芝を踏み、脚を上げて土を蹴り、前へ、前へ、ただただ前へ。

夜の闇から逃げるように。太陽の光に追いつくように。

果たしてそれがどちらだったところで、走っているのは楕円形の周回コース。半周回れば逆になる。

「……——ッハ」

ペースを上げた最後の直線。走っているのはただ一人だけのはずなのに、もし誰かがこの場にいたならば、そこに数多のウマ娘が駆けている姿を見ただろう。

前を往く、外から並びかける、後ろから追い込んでくる、それこそ夢か現かといった光景は、しかしただ一人走る本人にしか見ることが出来ない幻の舞台。そしてその主役であるところの彼女は、ナリタブライアンは、足音も、息づかいも、全ての幻をも置き去りにして、一人ゴールを駆け抜けた。

「……まだ、足りないか」



タイムは計っていない。それでも長くレースを走っていれば、今の自分の時計がどれほどだったのかは解る。

400メートルごとのラップタイムと、ラスト4ハロンと3ハロン、そして全体を通しての時計をもう一度頭の中で並べて、ナリタブライアンは小さく舌打ちした。

今年に入ってから少しはマシになったと思っていた。実際、阪神大賞典と天皇賞は久々に悪くないと思えるレースだった。

——直線に入るまでは。

調子は悪くない。脚の違和感もほとんどない。それでもかつての時計には程遠い。まるで脚を動かすための歯車がどこか一つ欠けてしまったように、どれだけ脳が動けと命令しても、その通りに動いてくれないもどかしさ。

癒えず、満たされず、果たしていつまで、そしてどこまで——などとらしくない感傷に息をついた、その時だった。

「ッ！」

一瞬、自分の横で何かが動いたように見えて、飛び退くようにナリタブライアンが一步下がった。

見れば、動いた何かは外ラチの辺り。元を辿るように視線を下げていけば、その何かは自分の脚元から伸びている。

いつの間にか日が昇っていたのだろう。もう一度、今度は苛立ちを隠さない程度に舌打ちしたナリタブライアンが、影に背を向けてコースの外へと歩いて行く。

まだ余力は十分にある。出来ればもう一本か二本と想っていたものの、日が昇ったという事はいいよ街も目を覚ます。そうすれば学園の門も開いて、走りたくてたまらないといった連中が何人かやってくる。

案の定、門が開くのを待ちわびていたような弾んだ足音が遠くに聞こえてきて、ナリタブライアンの耳がびくりとそちらを向いた。

——本番のレースならともかく、それ以外の時はなるべく一人がいい。

そんな願いを叶えるために、生徒会に入れと言われた時に申し出た交換条件——トレーニング場の時間外利用の特権も、どうやら今朝はこれまでのようだった。

Φ

ナリタブライアンの朝は早い——というのには、おおよそ三つの理由がある。

走りたくなって目が覚めた時か、なんとなく目が覚めて走りに出た時か、そして意識して一人で走りたいと思った時か。

つまるところ走りたいたい時であり、走る時であり、そんな時だ。

そしてどの場合においても走る場所は生徒会員特権、というよりはナリタブライアン個人の特権として誰もいないトレーニング場になるのだが、いつからかそれがトレセン学園七不思議の一つとして数えられていたりもする。

朝一番に來たはずなのに、既に誰かが走った跡が残っている。一体誰が、もしかしてデビュー直前に事故で亡くなったウマ娘の幽霊が夜中に——などという、よくあるやつだ。

どうにかしてほしい、原因を突き止めてほしいと嘆願されたシンボリドルフが、何故かその件についてだけは毎回はぐらかすものだから、噂が噂を呼び、尾ひれ背びれ胸びれくらいまで付いてしまっているのだが、それはまた別の話。

噂の真相であるところのナリタブライアンといえば、今日も出たらしいよ、などと話す生徒たちの雑談などには耳も貸さず、一人教室に入って自分の席に座り、ぼんやりと窓から空を眺めながら授業の始まりを待っていた。

その立ち居振る舞いから走る事以外に興味がなさそうに思われるナリタブライアンではあるが、座学というのはどちらかといえば好きな部類に入る。

姉であるビワハヤヒデが言うには「単純に知らない事を知るのが好きなのだろう」というもので、同じ生徒会のシンボリドルフにしてみれば「それがナリタブライアンというウマ娘なんだよ」とよく解らない事を言い、もう一人同じ生徒会のエアグルーヴからは「生徒会の仕事もそれくらい真面目にやれ」という流れになる。